



巻頭言

自分で考え、自分で遊ぶ、

子どもたち！

青木久子

かつて、子どもが地域社会の一員として共同体の営みに参画していた時代から、幼稚園や保育所などで集団生活をするのが当たり前の時代を迎えてみると、幼児教育の難しさが身にしみます。

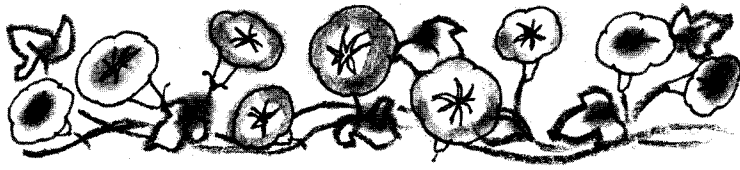
昨年の三月上旬、ある保育所にうかがいました。二歳前後の子どもが保育室前の小川にブルドーザーの乗り物を入れ、半身水に浸かりながら、寒さも忘れて車を動かしています。この寒さから身を守ってやるのが教育なのか、凍えながらも、自らの遊びにけりをつける自由を提供するのが教育なのか、夢中で遊ぶ子どもの姿に、J・ルソーの『エミール』（一七六二年）を思い出しました。この保育所では、ツリーハウスで遊ぶ子、小刀で木片を削って



おもちゃを作っている子、乗り物に興じている子、どの子どもも遊びに熱中しています。五歳児は、竹馬競争に精を出し、その歓声が木立に跳ね返ります。そこには遊びのユートピアがありました。

竹馬の子が集っている庭の中央が、夏は池になり、子どもたちはカヌーを浮かべて一日中、裸で遊んでいます。緑深い森のような庭は、冬温かく、夏は涼しく、子どもの闘魂をかき立てます。この保育所が掲げた目標は「自分で考え、自分で遊べ、子どもたち！」です。遊ぶ自由と責任を謳歌できる子どもたちは、給食も外で食べて、また続きの遊びに没頭するのです。野生と知性が融合するとは、こういう姿だろうと思いました。

幼児の自然を損なう最たるものは、生来遊ぶ子どもが「遊ばされる」現象です。J・ホイジンガ^{*}の言うように、遊びは文化以前にあったもので、遊びにおいて人類の文化が形成されてきました。まして、幼児期の遊びは「生」への飛躍、「生」の表現であることを思うにつけ、なんとか「遊ばせよう」「遊びを発展させよう」とする保育者たちの姿に、幼児教育の危うさを感じます。遊ぶのは子どもであり、遊びを発展・破壊するのも子どもであるはずなのに、なぜでしょう。「遊びを中心とした生活」をうたえばうたうほど、遊ばせようと頑張る保育者たちも苦しいに違いありません。



F・フレーベルは、遊びを幼年期教育に据えましたが、それは労作の手伝いと遊びと祈りの調和の中で、遊びに没頭できる環境・場所をつくることでした。彼は『人間の教育』（一八二六年）を著した当時、遊ばせるための教育的援助が語られる時代が来るとは、夢にも思わなかったのではないでしょうか。L・トルストイは、養育は強制的な感化であり、自らを陶冶する「教育学の対象ではない」としています。教育が（子どもの個を見据えぬお世話的な）養育・養護を掲げれば掲げるほど、依存度の高い自己意識の弱い子ども、大人の鑄型にはめられた子どもができるという警鐘は、百年以上も前に鳴らされていたのです。

しかし、いつしか自らの実践が教育学の始期にあることを忘れ、「養育」に手を染めている実践を目にするようになりました。子どもの自治を進める生活も少なくなり、持ち帰るタオルも保育者が忘れぬよう声をかける園も多く見られます。共同生活者として、子どもが行う室内の点灯や消灯、椅子・机運びや子どもが出した遊具の片付けまで子どもにもお願いし、礼を言うといった珍風景を見ることがあります。保護者から、転んだわが子を抱き起こしてくれなかった冷たい先生、わが子が制服を間違えたのは先生の落ち度、週末洗う上靴を忘れたのは指導の不備、といった苦情が頻発する時代です。子



ども主体と言いながら、保護者の要求に押されてしまい、子どもをサービス受容の客体として扱う矛盾にいちばん悩んでいるのは、現場の保育者たちかもしれません。

かつて倉橋惣三が幼児教育は教育学の範疇にあることは承知の上で、「教育」ではなく「保育」と称したのは、当時の悲惨な福祉の場に置かれた幼児を救済するためでもあったことに、もう一度思いを致すときがきているのではないでしょうか。そして、幼稚園・保育所を問わず、三歳以上の就学前教育は、「自発と具体を原理として行われるからこそ、遊びを重視するのだ」という遊びの意義を、保護者も保育者と一緒に学習することです。保護者が教育の協同者として、共によりよい環境を創出することに、力を合わせる時代をつくりだせれば、再び子どもの遊びが復活するのではないかと期待しています。

(青木幼児教育研究所 所長)

※ヨハン・ホイジンガ（一八七二—一九四五）オランダの歴史学者

主著『中世の秋』『ホモ・ルーデンス』

関連文献

青木久子・磯部裕子・山内紀幸・浅井幸子・佐藤公治・石黒広昭著

『知の探究シリーズ第1〜6巻』萌文書林二〇〇七〜八年